

コラボレーション・アクティブラーニング

ー リベラルアーツ教育と造形デザイン教育による共同プロジェクトの教育事例 ー

片山 博文・藤崎 いづみ

キーワード：アクティブラーニング、コラボレーション、単位外性、総合大学、学群文化

概要

本論文は、2015年度に桜美林大学町田キャンパスでリベラルアーツ学群と芸術文化学群造形デザイン専修の学生が共同開催した農業イベント「アグリベラル・マルシェ」の内容を紹介し、その教育実践上の意義を考察する。本イベントは、異なる教育組織であり学問・専門領域の違う学群が「単位外」で共同して取り組んだ「コラボレーション・アクティブラーニング」と呼ぶべき教育実践である。この単位外でのアクティブラーニングは学生の主体性・能動性を引き出し、教員と学生の共存性を生産する。また、異なる学群の学生による教育組織レベルのコラボレーションでは、両学群の「学群文化」の違いがクリアに表れ、お互いの価値観の差異がプロジェクトに独特の活気を与え、学生に独自の気づきや成長、創造性をもたらす。それはまさに総合大学の教育のカタチのアクティブラーニングであり、本学における「学群間コラボレーションのすすめ」としても、大きな意義を有している。



「アグリベラル・マルシェ」2015年12月 明々館1階学生ラウンジ会場風景

はじめに

本論文は、2015年12月に本学町田キャンパスで開催された農業イベント「アグリベラル・マルシェ」の内容を紹介し、その教育実践上の意義を考察するものである。本イベントは、リベラルアーツ学群で農業に関心をもつ学生が結成した「アグリベラル・マルシェ実行委員会」（顧問：片山博文）、および芸術文化学群造形デザイン専修の学生が主に運営し、様々な地域プロジェクトに積極的に関わっている「はやおサークル」¹⁾（顧問：藤崎いづみ）所属の学生が中心となり、両学群学生が共同で開催したものである。おそらくリベラルアーツ学群と芸術文化学群の本格的な共同教育実践としては、本学ではじめての試みであると思われる。そこで本論文においてわれわれは、本教育実践を「コラボレーション・アクティブラーニング」と名付け、その意義を論ずる。

本教育実践が「アクティブラーニング」の一種であることは多言を要しないであろう。最近、本学においてもアクティブラーニングの重要性がとみに認識されるようになってきているが、一般にアクティブラーニングは、「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習」（溝上 2015：32）と定義され、またアクティブラーニング型授業は、その目的に応じて「専門知識を活用して問題解決に取り組む高次のアクティブラーニング」と、「専門知識の定着を目的とする一般的アクティブラーニング」に分類される（河合塾 2016：3）。われわれは本教育実践を、学生の主体性・能動性を引き出すことをめざす、まさにアクティブラーニング的な実践と位置づけて取り組んできた。

そして本稿で論ずる「コラボレーション・アクティブラーニング」は、アクティブラーニングの趣旨を実現する一つの有効な手段となり得る、というのがわれわれの主張である。というのは、以下本論で論ずるように、異なる学群の学生が個人レベルではなく組織レベルでコラボレーションするときには、両学群の教育方針や学びの視点・手法、ひいては「学群文化」とも言うべきものの違いがクリアに表れ、プロジェクトに独特の活気と内容・表現の豊かさ、気付きや成長をもたらすからである。また、こうした学群間のコラボレーションを通じて他学群の実践から学んだ学生は、その学びを自分個人の学びとするにとどまらず、自分の学群組織での学習改善の形で具体化し、定着させ、次世代に受け継がれるようにしようとする。それはまさに総合大学ならではのアクティブラーニングであり、その紹介は本学における「学群間コラボレーションのすすめ」としても、大きな意義を有していると考えられる。以下本論文では、まずアグリベラル・マルシェの概要を紹介し（第1節）、次にリベラルアーツ学群・芸術文化学群造形デザイン専修のそれぞれの学生によるアクティブラーニングとしての取組みの内容と経緯を、前述の「単位外性」と「コラボ性」に留意しながら述べることにする（第2・3節）。以上を通じて、コラボレーション・アクティブラーニングの意義と可能性を明らかにしたい。

1. アグリベラル・マルシェの概要

農業イベント「アグリベラル・マルシェ」は、2015年12月7日(月)～8日(火)12時～18時、本学明々館1階学生ラウンジをメイン会場に開催された。主催はリベラルアーツ学群の2～4年生23名で構成される「アグリベラル・マルシェ実行委員会」である。実行委員会は、片山ゼミの2015年度ゼミ生を中心に、農業に関心ある学生が集まって結成された。メンバーの専門(メジャー)は、国際経済、国際協力、ビジネスエコノミクス、公共政策、哲学、倫理学、環境学、メディア学、心理学、現代世界文学とリベラルアーツらしく多彩な学生から構成されている。

イベントの趣旨は、農業が本来持っている魅力を表現し伝えることによって、桜美林大学の学生にとって農業をより身近なものにし、農業を将来の仕事の選択肢の一つとして考えてもらうことである。イベント名称「アグリベラル・マルシェ」の「アグリベラル」とは、農業を表す agriculture とリベラルアーツ liberal arts とを結合した造語であり、専門家にはない多角的な視点で一般の人たちに訴えかけ、農業に馴染みのない「普通の学生」と農業の距離を縮めることをコンセプトとしている。

主なイベント内容は、次のようになっている。

(1) 農園紹介と直売所形式の野菜販売：大学近隣地域で「農によるまちづくり」に積極的に取り組んでいる株式会社 FIO (八王子市)、まちだ里山農(みのり)の会(町田市)、牧郷豆の会(相模原市)、および本学の授業「地域社会参加」の実習や東北復興支援ボランティアでお世話になっている山元いちご農園(宮城県亶理郡山元町)の4つの農園にお越しいただき、直売所形式で各農園の野菜や加工品を販売した。その他、相模原市の小俣園芸からは、加工品の販売で協力を得た。

(2) トークイベント・試食会：「ピーチかぶ」「かぼっコリー」などで知られる独自のブランド手法で生産者を支える農業ビジネスを展開してきたオイシックス株式会社の方を招いてトークイベントを行った。また、しいたけで有名な貫井園(狭山市)の貫井香織さんや、前述の(株)FIOの船木翔平さんを招き、それぞれの農園の食材を使った座談会形式の試食会を実施した。

(3) その他の各種ブース：実行委員会の中で実家が福島で農業に従事しているメンバーが中心となり、原発事故の風評被害や農家の「あとつぎ」問題をテーマにワークショップを実施した「シンキングオブライス」、農林水産省経営局就農・女性課に相談員としてご協力いただいた「農水省に聞く就農相談」、本学唯一の農業サークル「アグリアクション」の活動紹介、芸術文化学群造形デザイン専修学生による本イベントのキャラクターデザイン紹介、実行委員会メンバーの農業体験紹介、ベランダ菜園キットの配布など、多彩なブー

スが明々館1階学生ラウンジで展開された。

以上がアグリベラル・マルシェの概要である。2日間にわたるイベントは盛況で、直売所では農園の方々が用意した野菜・加工品が全て完売するほどであった。イベント来訪者に対して行った「満足度アンケート」では52名の回答を得たが、開催期間につき「長い・丁度よい・短い」の内から選択する設問では4割が「短い」と回答するなど満足度は高く、ほとんどの学生が農業への関心が高まったと回答していた。また片山は担当授業「農業経済論」の授業外学習に本イベントを利用し、受講生に会場訪問やトークイベント等への参加を求めその感想コメントを授業で紹介するなどしたが、その感想も好評であった。

こうしたイベントの成功と実行委員会の活動を支えたのが、芸術文化学群造形デザイン専修の有志学生によるデザインチームである。デザインチームは、ビジュアルコミュニケーション表現研究として本イベントに取り組み、「農学」という自分たちにとり未知の学問分野を、それぞれの表現分野において試行錯誤を重ねながらカタチにした。具体的な活動内容は、①アグリベラル・マルシェのキャラクターデザイン、②宣伝広告フライヤーのデザインと制作、③メイン会場である明々館1階学生ラウンジの空間デザインと現場ディレクション、④パンフレット冊子の編集デザインと制作である。この農学・農業をどう視覚情報処理するかというまさに掴みようのないプロジェクトは実に喜怒哀楽があり、学生の感受性を高める非常に創造的な経験であった。そしてそうした取り組みの中から生まれたビジュアル表現は、アグリベラル・マルシェを盛会に導いたのである。後述の芸術文化学群造形デザイン専修のアクティブラーニングで詳しく述べることとする。



「まちだ里山農の会」出店空間デザインブースとアグリベラル・マルシェのビジュアルデザイン空間
2015年12月 明々館1階学生ラウンジ会場風景

2. リベラルアーツ学群のアクティブラーニング

以上前節では、アグリベラル・マルシェのイベント内容の概略を紹介した。これを受けて本節では、まずリベラルアーツ学群の取り組みのプロセスを、「単位外性」と「コラボ性」という観点から振り返ることにする。

まず本イベントの単位外性である。本イベントは、ふだん両学生にゼミその他で接している片山と藤崎が学生に実施を提起し、両教員の指導下で行われたものではあるが、具体的な科目の「授業時間外学習」として行われたものではなく、授業と直接関連づけられてはいない。以下本論では、こうしたアクティブラーニングの型を「単位外アクティブラーニング」と呼ぶことにする。

本教育実践が異なる学群どうしの「コラボレーション」として行われたことは、この「単位外」という本アクティブラーニングの性格と密接に関係している。というのは、本学は現在5学群を擁する総合大学として存在しており、また本学の特徴として他学群の科目履修が授業科目によって可能であることから、一つの授業科目を複数の学群の学生が履修することはごく普通に行われているが、異なる学群の学生が個人レベルではなく組織・集団のレベルで授業においてコラボレーションするためには、その授業科目が双方の学群のカリキュラムの中に正式に位置づけられていなければならない、それは教務上容易な事ではない。このことが、本学において学群間のコラボレーションがあまり行われてこなかった制度上の大きな理由の一つであると考えられる。もちろん、「単位外」という性格はコラボレーションの本質的要素ではないが、本教育実践においてコラボレーションを実現可能にした大きな制度的条件が、この「単位外」としての性格であったとは言えよう。

このように、本イベントを単位外の取り組みとして行うことはコラボレーション成立のための必要条件でもあったのであるが、単位外性は単にそうした外的要請にとどまるものではない。単位外性は、本アクティブラーニングに取り組むにあたり、われわれが最もこだわった点でもあった。

単位外アクティブラーニングの特徴は、第1に、その優れて主体的・能動的な性格にある。藤崎はこの点につき、2012年度に行った自主ゼミの教育実践を総括した論文で次のように論じている。「教育とは、履修ガイド上や教務上の設定された枠組みを超えて、学生の人生の喜怒哀楽と向き合うことにより、思いがけない指導の効果や感動があり、学生の表現したいことや研究テーマにたどり着くことがあり得る」(藤崎 2014 : 148)。つまり、自主ゼミや本実践のようないわば「単位外アクティブラーニング」こそ、学生の主体性・能動性を最大限に引き出すことができるのではないかというのが、われわれの共通の問題意識だったのである。

単位外アクティブラーニングの第2の特徴は、教員と学生との対等性である。教員が学生の学びのプロセスを明確にイメージし、到達目標や授業計画、評価基準・評価方法などが教員によって明示される通常のアクティブラーニングとは異なり、単位外アクティブラーニングでは、教員もまた学生と同様に模索のプロセスを歩むこととなる。そこで教員には、学生のアイデアを教員が正面から受けとめ実行していくというシンプルさが求められ、またその際には、学生の創造性や実行力が教員を上回る、という状況が起こり得る。学生とこのように向き合うことは教員にとって覚悟のいることであるが、それはまた教育における最もすばらしい瞬間でもある。藤崎は先の論文でこの点を「学ぶべき者と教える者の共存性」と規定し、武蔵野美術大学甲田洋二元学長の「小中高教育で美術の時限数が削減しているが、美術、絵画こそが教員と生徒の上下関係が関係ない科目である(中略)小学生の作品感性が美術教員を上回る、という状況はこの科目、学問の素晴らしさである」という言葉を引用しつつ、次のように述べた。「学生と教育者は、共存していく事が大切で、信頼し連携していく…美術、デザインという学問では、導く者が導かれる面々に導かれる楽しさがある」(藤崎 2014 : 159-160)。

こうした特徴はもちろん通常の「単位内」アクティブラーニングでも担保されるべきであろうが、単位外アクティブラーニングではそれらはより明確になる。実際、アグリベラル・マルシェ実行委員会の活動は、はじめの企画段階から悪戦苦闘の連続であった。本イベントは筆者の一人片山が学生に農業イベントの実施を呼びかけることから始まったのであるが、片山はそもそも農業の専門家ではなく、自らの農業経験もほとんどなく、農業知識や農業関係の人脈も十分とは言えない。ただ日本の食料自給率の低下や農業者の高齢化・後継者難を憂い「学生に農業のことをもっと考えてほしい」という思いだけで、学生がそれに共感するところから始まったのである。

当初は、地元の農作物を使った商品開発などということを考えていたが、少し具体的に考え始めると、それが容易ではないことにすぐ気づいた。教員は学生のファシリテーターなどという聞こえはいいが、実態は片山がノー・アイデアであることは学生も分かっている。ここから学生たちの徹底的な議論が始まった。どのようなイベントを行うかという議論が続いたが、その中で絶えず中心的なテーマとして議論されたのは、「農業の魅力を伝えるとはどういうことか」ということであった。そして学生のたどり着いたのが、「農家との交流から学内マルシェへ」という方式だったのである。すなわち、町田・相模原・八王子で農業とまちづくりに取り組んでいる農園を探して、そのマルシェや農業体験に参加するなどして農家との交流を進め、まず自分たちが体験で農業の魅力を知ること、そしてそれを踏まえて、農業イベントにそれらの農園を招き、農園を紹介しつつ新鮮野菜の直売を行うというものである。

本イベントの実施までには他にも多くのハードルがあったが、このイベントの骨格が決まるまでが、先が見えないという意味で、最も苦しい時期だったと言える。「イベントの骨格が決まる」というのは、言い換えれば、「イベントを通じて伝えたいメッセージが決まる」ということである。みずから農作業を手伝い、育てるのを手伝った野菜を買ってもらい・食べてもらうというシンプルな構図が出来上がってからは、それ以降のハードルは単に解決すべきものとして前向きに捉えられるようになった。

その意味でアクティブラーニングとは、学生が自分自身のメッセージを見出すプロセスでもある。「他人に本当に伝えたいこと」があるかどうか、それが単なる授業課題としてのプレゼンテーションと真のプレゼンテーションを分ける本質的な点である。デザインチーム学生が作成したパンフレットには、そうした学生たちのメッセージがあふれている。アグリベラル・マルシェ実行委員長の今井海太郎君は、そんな自らの思いを、「委員長挨拶」を詩で書くという前代未聞のやり方で表現した。「自然の中で自然と働く／本当は近いのに／遠く見えているだけなのかもしれない／土を見て仕事して／空を見て帰る／今日はちょっとだけでもいいから／そんなことを想像してみよう」。彼だけでなく、他の学生による農園紹介やブース紹介の文章も、驚くほど生き生きとした表現で描かれている。

以上、リベラルアーツ学群の本イベントへの取り組みをその「単位外性」に焦点を当てて振り返ってみたが、こうした取り組みができたのは、「単位外アクティブラーニングサークル」としての「はやおサークル」に所属し経験を積んでいたデザインチームとのコラボレーションに負うところが大きかったと言える。芸術文化学群の「学群文化」から多くのことを学んだのである。第1に、イベント形式の教育実践は、常に「失敗」というリスクと向き合っている。とくに今回のような規模の大きなイベントは、筆者の一人藤崎が「サッカーの地域リーグの無名クラブチームが、国際試合に参戦するようなもの」と評した通り、かなりのリスクをとまなうものであった。一方、デザインチームの学生が所属するはやおサークルの学生にとり、芸術表現は、作品発表により本人というアーティストが批評や批判にさらされ傷つくことをともなう。そのネガティブ感情を認め、人も作品も強く美しくなりその経験が生きる力になるという。しかも、はやおサークルは単なる自主サークルではなく、地域協力をはじめ外部からの「仕事」を請け負う極めて真剣度の大きなサークルでもある。その学生たちの「覚悟」に学ぶところは大きかった。

リベラルアーツ学群の学生がデザインチームから学んだ第2の点は、世代間・学年間交流の重要性である。周知の通り、リベラルアーツ学群は、様々な意味で学年間協力の弱さが一つの課題となっている。一方、「単位外アクティブラーニングサークル」としてのはやおサークルは、芸術文化学群造形デザイン専修に加え他専修や他学群まで含めた1年生から4年生までが在籍し、色々なイベントが継承されている。そうした他学群の活動をみ

ることにより、リベラルアーツ学群の学生も学年間交流の重要性に気づくこととなった。現在、アグリベラル・マルシェ実行委員会の学生たちは、イベントを単発に終わらせず「第2回アグリベラル・マルシェ」の実施を企画中であるが、同イベントが後の学年に受け継がれてほしい、という思いが、取り組みの動機の一つとなっているようである。

3. 芸術文化学群造形デザイン専修のアクティブラーニング

次に、芸術文化学群造形デザイン専修のアクティブラーニングについて、リベラルアーツ学群との違いに留意しながら記述する。

芸術文化学群造形デザイン専修有志学生のデザインチームの目標は、「農学」という学問分野の「美」を、どう視覚伝達し実現するかである。以下にその4学生の「農学と農業の美」をデザインとして発信した、具体的表現研究事例を紹介する。

(1) 上郡美和(2年)

「アグリベラル・マルシェ」のコンセプトから日本の農業と自然界の神をキャラクターデザイン化した。以下のキャラクターコンセプト設定は上郡さんの考察であり、キャラクター名称は片山によるものである。



【農業の神】神産巢日神(かみむすびのかみ・ムスビイ)
農業の神様で農業を最初に生み出したとされる神である。性格は温厚で農業に関わる人々、神々、農作物や動物達をこよなく愛している。日本の農業の人手不足や価格の高騰を天上から見守るのが日課である。



【風の神】志那都比古神(しなつひこのかみ・シナティ)
天然ちゃんて主に鳥達と遊んでいる。自由奔放な面が多いため基本は緩やかで心地よい風を吹かせているが、ちょっとした言動で怒りだす。怒っている度合いで風の強さと脅威が変わる。



【水の神】閻湊加美神・閻御津羽神

(くらかみのかみ・くらみつみはのかみ・オカビ&ミズハ)
左がオカビで地の水の神、右がミズハで天の水の神。オカビは湖や海、川を汚された時に怒り狂い津波や氾濫、豪雨をおこす。



【農民】現代の就農に携わる若者（アグ丸くん）
人間の青年。桜美林大学リベラルアーツ学群所属の三年生である。若くても農業の世界で働こうと思ひ農業の知識、体験を自分の意志で学んでいる活発な青年。



【太陽の神】天照大御神
（あまてらすおおみかみ・アマテル）
太陽の神であり最高神である。常にお母さん的な存在で神も人も包み込むような優しさと雰囲気。

これらのキャラクターは、「アグリベラル・マルシェ」のコンセプトに愛情を持って向き合い、シールを制作し、販売用菜園キットプランターや農産物商品のパッケージのワンポイントに活用した。他に宣伝広告フライヤー、懸垂幕のデザインにレイアウトし、セールスプロモーションとして丁寧なアプローチを試みた。

(2) 春本くるみ (2年)

宣伝広告フライヤーデザイン制作担当。地球環境を意識した、明瞭で自由なフライヤーデザイン制作とデータ印刷入校担当。

いのちを育てよう！
ペランダ菜園キット配布
シンキングオブライス
～食べて考える日本の農業のこれから～

桜美林大学農業サークル
アグリアクションの紹介
オリジナルキャラクターと
デザインチーム紹介

あぐ丸くん

ムスビ

マルシェ
農産物・加工食品販売

耕せ！農LIFE!!
農業体験
農業インターン
ジブ紹介
農水省に関する
就農相談
農林水産省
経営相談員・女性課
13:00～14:00

2015.12.7(Mon)12:00開店
Open12:00-Close18:00

アグリベラル
マルシェ

無料ワークショップのご案内
お申し込み・お問い合わせ先
お申し込み・お問い合わせ先
お申し込み・お問い合わせ先

桜美林大学明々館1F学生ラウンジ&他教室
主催 桜美林大学アグリベラル・マルシェ実行委員会
協力 農水省 農研機構 農研機構 農研機構 農研機構
桜美林大学アグリベラル・マルシェ実行委員会 桜美林大学アグリベラル・マルシェ実行委員会
桜美林大学アグリベラル・マルシェ実行委員会

宣伝広告フライヤー(表面)

みなさんは、農業について考えたことはありますか？
農業の魅力を、リベラルアーツらしく多面的・複眼的に伝えたい。農業をもっと身近に感じて、将来の選択のひとつとして考えてもらいたい。そんな思いから生まれたのが「アグリベラル・マルシェ」です。マルシェにトークイベント、試食会、農業キャラ展示、就農相談と内容はもりだくさん。リベラルアーツから始まる。新しい農業ムーブメント。合言葉は、耕せ！農LIFE!!
学生のみならず、それに関心の方々も、ぜひお気軽にお越し下さい！

Contents 他教室イベント

(トークイベント)
Olisk 流アグリローチ
～日本の農業の可能性～
ゲスト：Olisk 株式会社
12/7(月) 16:10～17:40
明々館 A408 教室
日本農業の危機が叫ばれる中、がんばる農業生産者を独自のブランド戦略で支えてきた Olisk に、日本農業の可能性をお聞かせします。
入場無料、お気軽にお越し下さい。

(試食会)
1日1回開催定員は各20名
参加料 500円
農業女子 PMメンバーと味わう
農仲間～こだわりの家らしいつけ
12/7(月) 14:40～15:40
ファカルティクラブ
農FOに関する農業の魅力&
アグリライズ大会
12/8(火) 14:40～15:40
ファカルティクラブ
お申し込みは agri.liberal@gmail.comまで、
氏名・学部学年・連絡先 TEL を添えて、
締切は 11月30日(月)。

宣伝広告フライヤー(裏面)

本人の制作コンセプトと意図を記述する。「農業や自然のこゝを見せつつ、伝えるべきことの優先順位を考え、分かりやすいフライヤーになるように心がけました。農業に興味を持ってもらう入り口として、このフライヤーをきっかけに少しでもアグリベラル・マルシェに足を運んで頂けたなら嬉しい限りです」領域の違う学問分野の表現研究を一枚のグラフィックで、どの様に知ってもらおうか。デザインの本質と向き合っ若々しいメッセージの構成を試みた。

(3) 荒川理 (2年)

空間プロデュース担当。明々館1階学生ラウンジを、農業空間として独自のスタイリッシュな世界に演出することが目的である。出店農家ブースと農林水産省就農相談ブース、農園紹介を含めた全体会場デザイン担当。遊び心を大切にしながら、アグリベラル・マルシェ実行委員会と密に議論し思考を共有して、純粋なメッセージを空間発表した。



季節感やナチュラル思考、表現研究や機能性を重視して空間構成したアグリベラル・マルシェ
2015年12月 明々館1階学生ラウンジ会場風景

本人の制作コンセプトと想いを記述する。「農家は人々に『命』を与えてくれる人。そんな人たちが思いを込めて作った野菜や果物をどのようにディスプレイすれば、美味しく見えるか。少しでも多くの人に農家さんの良さを伝えたい、農家さんの色を出したいと思い、農家ごとに違うディスプレイ空間を作りました。」その空間は、様々な問題解決のプロセスを経由し、リベラルアーツ学群の提示する農業のコンセプトに寄り添う一方で独自のスタイルを貫き、セールスプロモーションプランを考慮して具現化したものである。その結果、写真にみられるような「ホワイトマルシェ空間」が仕上がった。後述で詳しく述べるとする。



「町田里山農の会」
 「山元いちご農園」
 紹介ブースのディスプレイ
 デザイン



「植えるだけ!ベランダ菜園キット」
 紹介ブースのディスプレイデザイン
 & クリスマスツリー

(4) 元吉海生 (1年)

各ブースのコンセプトキャプションデザイン(農園紹介コーナー、試食、座談会イベント等)と、パンフレット冊子編集デザイン制作担当。表現研究を記録として残すため、各ブースのコンセプトの印象と文字情報をエディトリアルデザイン化し、グラフィック展開とタイポグラフィーへのこだわりを融合。掲載画像





はパンフレットの抜粋ページである。ここで1年生が先輩達と共に、挑戦した本人の制作コンセプトと情熱を記述する。

「僕は漬物が大好きだ。白菜の浅漬けなんて、もうたまらない。ちょろっと醤油をかけた浅漬けを、ご飯と一緒に一口。口から鼻に伝わる酸っぱいにおいが、空っぽの胃をグッと刺激する。そして浅漬けが舌に触れた瞬間、舌の上で咲き誇る絶対的な和の味。ああ、考えるだけで口の中はもうJAPANコールで大賑わいだ。愛情たっぷり込められた白菜で作る、美味しい浅漬け。うん、悪くない。マルシェで白菜を買って、浅漬けでもつくろうかな。そんなことに思いを馳せながら作ったパンフレットです。」

パンフレット表表紙と挨拶文(左)
パンフレット裏表紙(右)
表裏表紙は3年生春本くるみがデザイン、冊子は2年生元吉海生が編集・デザイン表裏表紙のみカラーコピーで印刷した



このパンフレットの表裏表紙はカラーコピーでの手作り制作である。各誌面は白黒コピーでの手作り制作である。Illustratorで編集したモノクロのコンストラストがフラットな印象で学術的で知的な品位のある仕上がりとはいえよう。

アグリベラル・マルシェのデザイン領域表現内容について、更に記述する。

デザインチームは機能的で美しいデザイン空間を創ることを目指した。本学で毎年、恒例に飾られる明々館1階学生ラウンジのクリスマスツリー装飾を活かし、クリスマスマルシェの空間コンセプトを展開した。以下である。

クリスマスマルシェはホワイトマルシェを意識し華やかに彩った。思えば、明々館学生ラウンジは活気にあふれた学生の日常空間である。デザインチームは、そこを圧倒的に気品に満ちた、白を基調とした静かな異空間に変えることを意図した。結果、野菜の香りや農家の畑や、土の匂いという日本の風土を飾るためのホワイトマルシェ空間が出来上がった。それは繊細で、日中は明々館のガラス壁面からの12月の暖かい光に包まれ、夕刻はクリスマスツリーの装飾が放つ幻想的なイメージを演出した。



夕闇が美しい「デザインチーム」と「牧郷豆の会」紹介ブースのディスプレイデザイン&クリスマスツリー

農学、農業という牧歌的な印象の世界観をどのように斬新にアプローチするか、対峙するコンセプトをぶつけ、印象的なコントラストの空間に焦点をあて具現化した。そして、農園紹介出店ブースに農家の「親父達」は日本の農業をそのままに持ってきた。そこにはヨーロッパのマルシェではなく日本の農業、販売所、直売所が展開した。それを美しくスタイリッシュなホワイトマルシェ空間が引き立てた。野菜も輝いていた。ぶつかり合い融合した自然界のロジックそのものである。

宣伝広告フライヤー、キャラクター、パンフレット冊子は農林水産省やその他の外部団体を意識して緻密に丁寧に制作した。制作にあたっては、誰にでも愛されオリジナリティが

感じられる品格の表現にこだわった。リベラルアーツ学群生と共に目標に向かいもの創りをしたことは、デザインチームとして農業とアートの共通のアイデンティティを保有する楽しいプロセスであった。地球をキャンパスとして自然のコンテンツである光、水、風等々で農作物を創る、農業というアート。この究極のクリエイティブをどのようにビジュアル表現すればいいか。さらに、農業には豊作を祝うためのお祭りがある。アグリベラル・マルシェをフェスティバルとして表現すべく、VISUAL WORLD 全開を目指したのである。

このように、デザインチームは本イベントにおいて自らの潜在力を十分に発揮し、顧問である藤崎の予想を上回る成果を上げたのである。

以上がデザインチームの取り組んできた内容であるが、その「コラボレーション・アクティブラーニング」としての特徴は何であろうか。まず言えることは、企画実現に際しデザインチームが目指したのは、「他者のためのアクティブラーニング」だということである。リベラルアーツ学群のために「受動的かつ主体的に」アクティブラーニングに関わったのであり、ここにリベラルアーツ学群とは異なる芸術文化学群造形デザイン専修としてのコラボレーションの大きな特徴がある。

筆者藤崎はこの論考を執筆しながら、本イベントにおいてデザインチームは他者のために真剣になり、そのことを通じて心豊かに成長できたと確信している。造形デザイン専修有志学生が持っていたのは、アグリベラル・マルシェに取り組むにあたってリベラルアーツ学群の学生以上に責任を感じ慎重になるべきである、という思いであった。そこから、学問領域の違う研究表現を思いやること、自身の研究表現に誇りと自覚をもつことを体験したのである。

学修単位取得外で他者のために何かを創ること、他者に力を注ぐこと。この「単位外」としてのコラボレーション・アクティブラーニングが、学生から驚くほどのクリエイティビティ、創造力を引き出すことを可能にしたのではないかと考えている。そしてそのことを通じて、学生は本来の人間力と生命力を獲得でき、「社会人力」を見い出すことができたのである。「はたらくこと」は、「はたをらくにすること」である。学生たちは日常の教育から、卒業後の出口に求められる大切なことを実感した。

その一方で、重要なポイントとして指摘しなければならないのは、デザインチームは、他者至上主義(アグリベラル・マルシェ至上主義)であっても自分達の美意識とデザインの感性、発想と哲学はいっさいぶれていないということである。芸術文化学群造形デザインチームには、クリエイティブなポゼッションがある。自分達のクリエイティビティに覚悟と自信があるからこそ、他者を支えることができる。これがデザインチームの矜持である。そうした覚悟が説得力をもち、作品を美しくするのである。

又、リベラルアーツ学群の「議論して考えを共有する」学群文化からの学びは新鮮で

あった。芸術文化学群造形デザイン教育では、考えを語るより、物事を実現・実行すること、言葉の力より視覚メッセージを重視している。コラボレーション・アクティブラーニングでは、学群どうしの対比する価値観やコンセプトが衝突することになる。そのことを示す象徴的なできごとがあった。実行委員会とデザインチームの学生が明々館学生ラウンジに一堂に会して打ち合わせを行っていたときに、物を創る、実行することを重視する藤崎と、考え、議論することを重視する片山との間で激論が展開された。教員が教育の進め方、方法論の違いからぶつかり合うことは教育や学生と真摯に向き合うために避けられないことである。議論が白熱したことで、学生たちは「学群文化」の違いを闘わせることの重要性を教員同士の議論から気づいたのであろう、実際、学生たちはそれ以降お互いの学問領域にもっと関わり合おう、もっと分かり合おうと、一步成長し前進した様に思えた。

藤崎は、OBIRIN TODAY 第12号と第14号に、「総合大学における造形美術教育指導の立場から」という主題の論考執筆をした。そこで述べたことは、本論においても重要な視点である。アグリベラル・マルシェでのコラボレーション・アクティブラーニングで気付いたこと、それは、総合大学の美術デザイン教育では様々な学問分野が融合し、考えを共有することから学生の美意識の高まりと、譲歩できる豊かさが身につくということである。われわれが目指すのは、単科美術大学の、競い合い、個性を露出し、人より秀でていることを重視する教育とは一線を画して、お互いの学問分野の差異と価値観の違いを認め、文化を共有するグローバルで新しい美術デザイン教育である。その意味で、教員にとっても学生にとっても人間の育成と可能性の発現につながるアクティブラーニングは、まさに「人間形成プログラム」と呼ぶべきものであるといえよう。

藤崎は上述のOBIRIN TODAY 第14号においてひとつの視点にこだわり論説を記述した。それはフットボールと美術、デザインは世界共通言語だということである。2016年5月G7伊勢志摩サミット前の安倍首相との会談において、イギリスのキャメロン首相は、今シーズンのイングランドプレミアリーグでのレスター・シティFC優勝に関し、クラブチームの主力FW選手の岡崎慎司の活躍を話題にした。G7が終わるとEURO2016フランス大会が開幕した。藤崎は上記論文でフットボールは文化、教育、芸術と多面的に考察できる、と記し美術デザインと共通の理念であると論じた。そして、この視点は今回のアクティブラーニングでも振り返り再確認している。

今回のイベントに取り組むに当たり 筆者の一人片山が強調したことは、農業はリベラルアーツ的であると言うことである。農学・農業は本来的に環境・コミュニティ・市場を包摂する多面的な性格を有しており、また地球環境に直結する普遍性とグローバル性を有している。農業とリベラルアーツは親和性が非常に高いのであり、それが本イベント「アグリベラル・マルシェ」の根本的なコンセプトとなっている。美術・デザイン、農学・農

業が有する多面性とグローバル性という共通項目が、今回のコラボレーション・アクティブラーニングにおいて理念と目標をひとつにし、本イベントの成功を勝ち取ることができた要因であったのかも知れない。教員同士の教育の方法論に差があったとしても、次世代教育にこだわる教育論や、自然環境を研究テーマにグローバルに教育と表現研究に向き合いたいとの願いを共有していたことも、コラボレーションを促進した原動力であったと言える。

そもそも、学生の表現活動が主体の芸術教育は、それ自身が「アクティブラーニング」そのものである。昨今のようにアクティブラーニングが話題となる前の2011年から、芸術文化学群造形デザイン専修内で学生自主活動が自然発生した。それが「絵を描くだけがアートではない」をスローガンとする、芸術文化学群学生自主アートサークル「はやおサークル」である。その創設者で初代代表の佐々木幸太君は、本年度の中学校での美術科教育実習で生徒に次のように伝えた。「絵のもつ力はグローバルで、絵は文化、言葉が違ってても分かり合えるし、評価されるし、されない。美術は自分の作品に絶対に自信をもつ、世界でひとつの宝物、自分にしか描けない世界だ」。また藤崎(2012)(2014)において、「つくるを生きる」「生きるをつくる」がテーマの2009年の武蔵野美術大学80周年記念フォーラム「世界美術大学学長サミット」についてふれた。先の佐々木君の発言やこのシンポジウムのテーマのように、「物事を実現するチカラ」を育成することこそが美術デザインという学問分野でのアクティブラーニングの目的であり、それを通じて自身の人生や何かをクリエイトする「基点と起点」を見据えることが可能となる。「世界でひとつの生き方」をみつけるために必要な美術・造形デザイン教育におけるアクティブラーニングの意義は、今回のコラボレーション・アクティブラーニングでより明確になったのである。

結語

以上本論では、リベラルアーツ学群と芸術文化学群造形デザイン専修による農業イベント「アグリベラル・マルシェ」を「コラボレーション・アクティブラーニング」と規定し、その教育実践上の意義を考察してきた。そこでは、異なる学群・学問分野の交流と協働を通じて、お互いの差異と価値観を共有し、相手の学群文化を自らの学びにとり入れていくダイナミックな学びのプロセスがみられた。また、コラボレーション・アクティブラーニングは、「感情が感じられる教育現場」である。新しいものをつくり上げていく上での起承転結が、学生の変化・成長を促進する。

もちろん、見えてきた課題も大きい。今回の成功は教員側が主導したものと言うより、

アグリベラル・マルシェ実行委員長を初めとする実行委員会コアメンバーの純粋で真直ぐな情熱、芸術文化造形デザイン専修デザインチームの4学生とはやおサークルサポートメンバーの農業研究に対しての愛情と構築したい絆等々が自然に成長していくのを、片山・藤崎の教員サイドが見守った側面がある。また本イベントのように単位外性を前面に出して学生の創造性を引き出そうとする教育実践では、通常授業のようなはっきりとした枠組みがないだけに方法論の定式化が難しく、本論でもその点が不十分でありより深い考察は今後の課題に残されている。確実に言えることは、こうした「学生が教員を主導する」プロジェクトでは、教員の側にかかなりの覚悟が求められることである。ただそこに、教育の一つの醍醐味があることも確かなのである。

今回のプロジェクトは、筆者達自身の研究・表現活動にも大きな発展となった。環境経済学を専門領域とする研究者の片山は、農業という新しい研究課題に取り組む上での手がかりを得た。学生と畑を耕し種を選び、自ら農業体験しつつ人間・環境・農業の関連を考える新たな理論と実践の融合を追求している。また日本画制作を専門領域とするアーティストの藤崎は「日本の農業の美しい色を描く」という新境地を創る。日本の畑は、琳派的表現と岩絵具の繊細な色調による作風に適していること。地球上の自然界の色の豊かさを描くことも日本画に適している、と藤崎は確信しているのである。このように、筆者達がそれぞれの新しい表現と研究のテーマを掴むことができたのも、教員と学生の対等性、学ぶべき者と教える者の共存性にもとづく単位外アクティブラーニングの醍醐味であろう。

教育現場は常に生きている実感がある。2015年、秋学期の「アグリベラル・マルシェ」という熱風のような教育の時間の中でたどりついたのは、以下の学生への指針である。この経験を活かし、壁にぶつかっても起き上がること。何事も失敗をおそれず実行すること。大切なのは、その失敗やぶつかりあいであり、終わったことを引きずらないことである。生きる「基点と起点」を学ぶためのコラボレーション・アクティブラーニングであった。

謝辞：このような総合的なイベントは、学内各部署のご協力なしには成り立たない。実施のプロセスでは、学生生活支援課、教育支援課、地域・社会連携室、キャリア開発センター、施設・管理部、キリスト教センター、桜美林大学消費生活協同組合、学園広報課、入試事務室、インフォメーションセンター、桜カフェ、東亜サービス、芸術文化学群事務室、造形デザイン専修準備室などからさまざまな協力や支援を得た。また当日会場を訪れた教職員のみなさんには、野菜の購入やブースのワークショップ参加などに積極的にご協力いただいた。この場を借りて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

注

- 1) オールラウンドアートサークル「HAYAO」サークル。芸術文化学群造形デザイン専修学生を中心に学生自主サークルとしてアクティブラーニングの活動形態で地域や社会に関わり、産学協同各所から評価されている。先輩を敬い、後輩に暖かく。が自然に浸透し次世代につづくプロジェクトが学生の主体性で運営されている。2016年度で活動6年目になる。はやお「HAYAO」は初代代表が尊敬する宮崎駿の「はやお」である。

参考文献

- ・河合塾 (2016)『2015年度 大学のアクティブラーニング調査報告書』河合塾
- ・原研哉 (2013)『デザインのデザイン DESIGN OF DESIGN』岩波書店
- ・藤崎いづみ (2012)「絵画領域における現代学生への教育アプローチ―総合大学における造型美術教育指導の立場から―」桜美林大学『OBIRIN TODAY』第12号、pp.231-245
- ・藤崎いづみ (2014)「フットボールにおける造形美術デザインの表現研究と教育―総合大学における造型美術教育指導の立場からⅡ―」桜美林大学『OBIRIN TODAY』第14号、pp.147-162
- ・溝上慎一 (2015)「アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラーニング」松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために』勁草書房 (第1章所収)
- ・Robin Williams (2016)『ノンデザイナーズ・デザインブック [第4版]』マイナビ出版
- ・武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業・修了制作展 2015 目録



筆者の藤崎 (左) とデザインチームの荒川君と友人